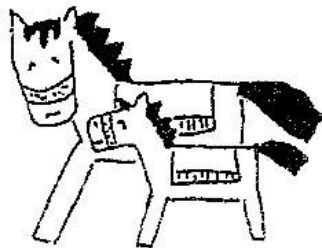


♪
お馬のかあさん
やさしいかあさん
子馬をみながら
ぽっくりぽっくり
あるく

おうまのおやこ

子育ても
あせらず待ちましょ
ポックリ、ポックリと

29年 2月 NO.267



〒 760-0044 香川県高松市御坊町2-2
高松保育園内地域子育て支援センター
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857
<http://oumanooyako.sakura.ne.jp/>

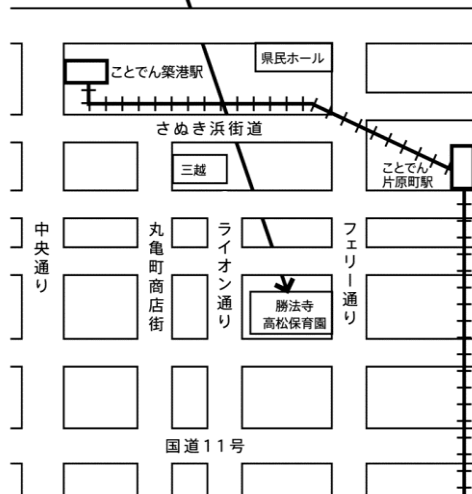
(厚生労働省・高松市委託事業)

～どなたでも～		2月の主な活動		～お気軽にどうぞ～
2月 4日	土	体験保育 10:00～12:00	体験保育	同じ年齢のクラスに入って一緒にあそびましょう。
2月 15日	水	香川みずぶさんの会 14:00～16:00	香川みずぶさんの会	イライラや怒りの感情と上手につきあうためのプログラム、アンカーマネジメントについて谷川由紀氏(社会保険労務士)よりお話を伺います。
2月 16日	木	とらまる座来園 15:30～16:30	とらまる座来園	「ぼっけえばあさん」と「ごんぞうむし」を上演しますので、どうぞおいで下さい。
2月 22日	木	おはなしの会 10:00～12:00	おはなしの会	“みんな仲良く温ったまろう”をテーマに大型紙芝居やパネルシアターがあります。
2月 24日	金	健康育児相談 11:00～12:00	健康育児相談	園医師(小児科医)にゆっくり相談できます。 (予約要)
2月 25日	土	体験保育 10:00～12:00	体験保育	出産予定の方も育児体験においで下さい。
2月 25日	土	おとなアート 14:00～16:00	おとなアート	満開の桜の大木を自分なりに描きます。 小学生もどうぞおいで下さい。

・火～土の9:00～18:00までは、園内開放していますので、親子でご来園下さい。
(但し、月・日曜・祭日は休み)

育児相談(月～土) 9:00～18:00
しつけや子育てについての悩み、保育園生活入園・見学についての相談もどうぞ。

香川県高松市御坊町2-2
高松保育園 地域子育て支援センター



金子みずぶ全集④
「空のかあさま・下」より

「お番」の晩は雪のころ、
雪はなくても暗(やみ)のころ。
くらいい夜みちをお寺へつけば、
とても大きな蠟燭(ろうそく)と、
とても大きな火鉢で、
明るい、明るい、あたたかい。
大人は騒いじりお話を、
子供は騒いじり叱られる。
ただ、明るくにぎやかで、
友だちやみんないらなくて、
なにかしんないじゃいられない。
更(ふ)けてお家へかえっても、
なにかうれい、ねられない。
「お番」の晩は夜なかでも、
からころ足駄(あしだ)の音がする。

報恩講(ほうおんこう)



自分を待っていてくれる人たち

佐伯 輝子

(寿町勤労者福祉協会診療所長、医学博士)

「5年も前から先生を探してるんですが、一向に決まらなくて困ってるんです」

自宅の医院と市内の診療所を掛け持ちし、多忙な日々を送っていた私の元へ横浜市から電話があったのは25年前。50歳を目前にした日のことでした。

現在、日本の三大ドヤ街の一つとして知られる寿町も、当時は世間に知られておらず、私自身もそこがどんな町であるか、見当もつきませんでした。実際、それまでも何人かの先生に依頼したそうですが、駅を降り、診療所に行き着くまでに誰もが引き返してしまう、それほど異様な雰囲気町の町だということです。

夫は「そんな危ない場所へ女が行くことはない」と断固として反対。それでも市と医師会からは「何とか1年だけでもお願いします」とたびたび電話がかかってくる。そんな時、私たち夫婦の会話をそばで聞いていた息子がこう言いました。

「ママを待っていてくれる人がいる限り、それを断っちゃいけないんじゃない？」

てっきり反対されるものと思っていた息子の一言には驚きましたが、あれだけ反対していた主人までが「それじゃあやってみるか」と言い出したのです。この時、女学校時代に担任の先生から聞いた「いいかい、人間の意見は二人は複数じゃないの。三人以上の意見があつてそれがまとまった時にうまくいくのよ」という言葉を何十年も経ってから実感しました。

初めての診察日、自動車で診療所前まで来ると、木立ちで用を足している男性がいます。仕方なく車の中で待っていると、私の気配に気付いた彼

が逆上し、車におしっこを撒き散らしてきたのです。木で車体を叩きつけられ、怒鳴り散らしながら去っていった姿を見ながら、これは大変な所へ来たと思いました。

診察に訪れる方は、泥だらけだったり、シラミがいたり、下着も穿いていない、健康保険に入れない方など様々です。しばらくすると、当初 20 名程度の見込みだった患者数が連日倍の数、多い時で 90 名を超え、待合室の廊下には人が溢れました。「うるせえ」「てめえ、このヤロー」といった怒号がわんわん飛び交い、落ち着いて診察もできません。一度、待ち時間の長いことに腹を立てた男性が、刃物を忍ばせて私に襲いかかってきたこともあり、その後しばらくは恐怖心が拭えませんでした。

患者に首を絞められ、危うく死にそうになったこともあります。入り口付近にいた男性が近づいてきて、肩をつかまれたかと思うと「久々に女に触れた」という興奮からか、私の首を絞めたまま痙攣状態になり、激しく震え出したのです。専任のガードマンと職員が 4 人がかりで引き離してくれましたが、腰が抜け、どっとその場にへたり込んでしまいました。私は寿町で死んでしまうかもしれない。その思いはいまでもあります。

当時、診療所に訪れる人たちの中には、逃亡中の身の上や、家を出て行方知らずになっている人も珍しくありませんでした。住人たちは寿町に身を潜めるように暮らしていましたが、それでは悪の温床になってしまう、なるべく明るみに出したほうがよいと思い、講演活動などの際に、私はこの町の存在を勇気を出して話してきました。

ただ、初めの頃は、皆のためにここへ来たと思っていた私ですが、いまになって、自分のためにここへ来たんだなと思うことが少なくありません。

いまから 15 年前、診療所での活動を評価され、吉川英治文化賞の受賞が決まった前の晩のことです。馴染みの患者から自宅に電話がかかってきました。「先生、いつも賞を受ける時、私一人の力じゃありません。スタッフ皆でいただいた賞です、って言うだろ。分かんねえのかよ。俺たちも

いままで、「協力」してきんだぜえ」

確かに医者とスタッフだけいても仕事にはならない。患者さんも含めての受賞。20代からずっと医療に携わってきた私もこの言葉には目から鱗うるこが落ちる思いでした。

診察をする上で、私は患者の方と視線を合わせる、ということを常に心がけています。だから「どこが悪いの」ではなしに、「きょうはどうしたの」と尋ねる。具合が悪いと聞けば、「私は医者でたまたま治し方を知っている。だから一緒に治してみる？」と持ちかけます。そして時には、一人の人間として声を荒げることもあります。

ある日、「ビール瓶で怪我けがをした」という男性が診察室にやってきました。巻かれてあったタオルを取ると、薬指はブラブラで、皮一枚についています。隣の小指はすでにありません。すぐに手術をしようという私に、男性は「指なんていらねえから取ってくれ。男の約束は、女には分かんねえんだよ」と言ってふてくされています。私はこう言いました。

「お母さんがあんたを産んだ時に、この指がなくてもいいと思ったと思うの。五体満足で生まれてくれて、ああよかったと思うのが女が赤ん坊を産んだ時の気持ちなんだよ。それを尊重せずに自分だけの命だ、指なんていらねえなんて言ったら、金輪際こんりんざい、女である私が許さないよ」

手術台のベッドで大泣きし始めた男性は、後日「人に初めて怒ってもらえて、すごく嬉しかったんだ」と教えてくれました。

休診の張り紙を出すと、いくら理由を言っても「先生、やめるんじゃないだろうな」「先生やめたら俺たち死んじゃうよ」と、駄々だだっ子のごねる寿町の住人たち。自分を待っている人がいる限り、それを断つてはいけない — 25年前、息子から言われた言葉を噛み締めながら、この生かされし命の使い道を考えるきょうこの頃です。

(熊平製作所「抜萃のつづり その六十六」より)

